

乳児の気質・母子相互作用と情動発達

(分担研究：相互作用と乳幼児の心理行動発達に
関する研究)

三宅和夫*、金谷有子**、中村千晶*、Bradshaw, D.*

要約 生後1年にわたる縦断的研究によって12カ月時における情動表出の個人差に母子間の情動的コミュニケーションのあり方が関連していることを明らかにした。また5カ月時の児の情動表出に対する母の反応の特徴についても検討した。

見出し語：母子相互作用，情動発達，乳児期

研究目的 昨年度においては、新生児期の泣きを中心としてみたいわゆる気質の特徴が5カ月時の母子相互作用にどのようにかかわっているかについての予備的報告を行なった。その後われわれは上記の対象児とその母親を対象として12カ月時において実験室において児の気質の特徴ならびに情動表出の特徴についての一連の実験的観察を実施した。今回は5カ月時における母子間の情動的相互作用と12カ月時における児の情動表出の特徴との関連について検討し、あわせて5カ月時の児の情動表出に対する母の反応の特徴についても検討する。

研究方法 12カ月時における実験の方法について略述する。

第1日

1. ウォームアップ 母子を待合室的なセッティングの部屋に案内し、母に児と自由にかかわってもらおう。
2. 自由あそび(7分) 数種類のおもちゃのあるプレイルームに母子を導入し、母には隅にある椅子にすわってもらい、児からの働きかけのない限り介入しないように指示する。
3. 見知らぬ女性への反応(4分30秒) 児の知らない女性が太鼓を持って入室し、はじめは黙って下を向いており、やがて太鼓をたたき、さらに児に話しかけてあそびに誘う。

4. ひとりあそび(7分) 新しく何種類かのおもちゃを用意してひとりあそびをさせる。

5. ロボットへの反応(4分) 実験者がロボットを入れた箱を持って入室し、箱のふたを開けるとロボットがゆっくり出てくる。この時母は児を床におろして自由にさせる。実験者は児にロボットであそぶように誘う。

7. 母と児の分離(4分) 6.が終って1分経過後、母が部屋から出る。2分後に戻り児をなだめる(2分)。

8. 怒りを誘発させる課題 児をハイチェアにすわらせ、a) 実験者がクッキーを児に渡し、児がクッキーを口に入れたらそれを取り、児が手をのばしても届かぬところへクッキーを持っていく、b) 実験者が児の両手を持って、児の胸のあたりで抑える。

第2日

1. 微笑みを誘発させる課題 児をハイチェアにすわらせ、a) 実験者がイナイナイバーを4回、母がイナイナイバーを4回、b) 実験者と母がハイハイをそれぞれ4回してみせる。

2. 母の禁止と児の反応を誘発する(5分) 母は隅にある椅子にすわり、児は自由にあそぶ。この部屋にはいくつか児にとって魅力的でそれに触るのを母が禁止しそうな物が置いてある。

* 北海道大学教育学部(Faculty of Education, Hokkaido University)

** 国学院女子短期大学(Kokugakuin Women's Junior College)

3. 母子間のあそび(5分) 決められたおもちゃで母に児とあそんでもらう。

4. 恐れを誘発させる課題Ⅰ 視覚的断崖装置を用いて、a) 母が児をうつ伏せ水平の形に抱き、児の足が先に台の表面につかないようにして深く見える方の側にそっと下ろす、b) 母が児の脇の下を持って抱き、深い方と浅い方の境界線近くに児の顔が深い方に向くようにすわらせる。c) 母が児を浅い方に下ろし、深い方の端から児を招く。

5. 恐れを誘発させる課題Ⅱ 奇妙なお面をかぶった女性が入室し、ハイチェアにすわっている児に声をかけ話しかけながら近づき、児を抱き上げ、つぎにハイチェアに戻して退室する。2回実施する。

6. 母の禁止と児の反応を誘発する場面(5分)

2.の場面と異なるのは児にとって非常に魅力的なモビールが置いてあり、あらかじめ母には児がそれに触れないようにと指示してあることである。

7. 自由あそび(5分) 母に対して一切自由であることを告げて、児のあそびを展開させる。

8. 他人の感情に対する感受性の測定 母が児を膝の上に抱いて椅子にすわり、テーブルをはさんで実験者と向き合う。実験者はテーブルの上にあるおもちゃを児が手を伸ばせば届く位置までずらして、おもちゃがそれまで児に見えないように立てておいた衝立をとる。児がおもちゃに触ろうとしたならば、喜び・怒り・恐れのいずれかの感情をこめて「あら、○○ちゃんに」と言うと同時に表情も作り、数秒そのままでそのあと普通の顔になる。30秒待って再び衝立を立てて10秒待ってから、また同じことをする。そのあともう1回計3回行なう。

その他

1. 母親インタビュー 児の社会的ネットワークについて、実験の過程における児の様子、ならびに母自身の気持ちについて

2. 実験のビデオの再生 1日目、2日目のビデオを再生して母に見せ、それぞれの場面で児がどんな感情をみせたか、どんな様子をしたかを言ってもらう。

3. 児の気質の特徴に関する質問紙 母に記

入を求める。

12カ月時における児の情動表出と5カ月時における母子間の情動的コミュニケーション

昨年の報告書に記した児の5カ月時における家庭での自然な母子相互交渉場面について90分間のビデオテープの記録にもとづいて、5秒単位で母・児それぞれの行動についてのコーディングを行なった。児については「泣き・ぐずり」、「母への注視」、「母への注視と微笑み」、「微笑み」など、母については「児への微笑み」、「児への誇張された表情・おどけた表情」、「児への笑い声・笑いを伴ったことばかけ」、「児へのリズムカルな、あるいは刺激的なことばかけ」、「児への普通のことばかけ」、「児への身体的刺激」、「頭を撫でたり、軽くたたいたりといった接触」、「おもちゃの提示」などである。これらに基づいてつぎの3つの変動が導きだされた。

1) 母からの児の微笑みを促す刺激度

2) 1) に対する児の応答度

3) 児の微笑みに対する母の応答度

これらそれぞれについて若干の説明を加えるとつぎのようである。

まず、1) は母からの微笑み・笑いを伴った刺激と、それらを伴わない刺激(つまりおどけた表情やことばかけや体を撫でたりするような刺激)とに分けられる。2) は母からの刺激の後10秒以内に児の微笑みが生じた場合であり、これは母からの刺激の総数に対する比率で表わされる。

3) は児の微笑みの後10秒以内に母が微笑み・笑いを伴って応答した場合と、母がそれらを伴わない刺激のみで応答した場合とに分けられる。これらは児の微笑みの総数に対する比率で表わされる。

つぎに、12カ月時の児の情動表出について今回はとりあえず、誘発された微笑みの強度を検討することとした。これはさきに記した実験手順の2日目の1.に対する児の反応を分析することによってなされた。すなわち各試行における児の微笑みの強度を4段階に評定しその平均値を算出した。母により誘発された場合と実験者により誘発された場合とは別々に平均値を算出した。1から4のそれぞれの強度は下に記す通りである。

微笑み反応の強度

- 1) 微笑みは口唇部分にのみ見られる。口角は多少上がり気味で後ろへ引かれているが、頬は上がっていない。眼の周りに皺は見えない。
- 2) 口角が斜上方に引かれているのがはっきり分かる。口唇はひらいていることが多い。頬は幾分膨らんでいる。眼の周りに皺が見えることが多い。
- 3) 口角は斜上方に大きく引かれている。口唇は大抵ひらいており、頬が膨らんでいる。
- 4) 3)に加えて弾むような発声、即ち笑い声が聞こえた場合。

ここで5カ月時の諸変数と12カ月時の児の微笑みの強度との関係のみをみると、「母からの児の微笑みを促す刺激度」および「児の微笑みに対する母の応答度」という変数と12カ月時の児の微笑みの強度との間には有意な相関はみられない。一方「母からの微笑みを伴った刺激に対する児の応答度」と児の微笑みの強度の相関はそれが母から誘発された場合有意であった($r = .395, P < .05$)。なお実験者によって誘発された場合には有意ではなかった。また「母からの微笑みを伴わぬ刺激に対する児の応答度」と児の微笑みの強度には有意な相関はなかった。つまり5カ月時に母が微笑みを伴って児から微笑みを引き出そうと刺激することに対しての児の応答度(微笑むこと)が高ければ12カ月時に母によって誘発される児の微笑みの強度が高くなるということが明らかになったのである。このことは12カ月における児の情動(微笑み)の発達にとって5カ月において児が母からの働きかけに対して示した応答度が重要なものであることが示唆されるし、さらに児の応答度といっても母からの微笑みを伴った働きかけに対してのものが重要であるということも推測される。したがってこれは児側の要因単独ではなく、母側の要因との相互関係が検討されなくてはならないことを示唆するように思われる。

そこで5カ月時における母子間の情動的コミュニケーションについての検討を試みてみたところ、「母からの微笑みを伴う児の微笑みを促す刺激度」と「それに対する児の応答度」の間の相関は有意($r = .484, P < .01$)であり、さらに「このような児の応答度」と「児の微笑みに対する母の微笑みを伴う応答度」との相関も有意($r = .502, P <$

$.01$)であった(母の微笑みを伴わぬ応答度とは相関しない, $r = .148$)。このことは母が微笑みを伴って児から微笑みを引き出そうとする働きかけが多ければ、それに対する児の微笑みによる応答度を高め、さらにそれに続く児の微笑みに対しての母の応答度(しかも微笑みを伴った)を高めるといような母子間の情動的コミュニケーションの流れが考えられるのではないかということを示唆するように思われる。もちろんこのような時系列的な相互作用分析を改めて行うことがこのことを明らかにするには必要なことである。なお、「母からの微笑みを伴わぬ児の微笑みを促す刺激度」と「それに対する児の応答度」との相関は有意でなく($r = -.092$)、さらに「このような児の応答度」は「児の微笑みに対する母の微笑みを伴う応答・微笑みを伴わぬ応答」のいずれとも有意な相関を示さない($r = -.284, r = .285$)という結果も上記の母子間の情動的コミュニケーションをさらに掘り下げて検討することが必要であることを示唆している。

12カ月という時期は母子間のアタッチメントにとって重要な時期であり、そこにおける児の情動表出のあり方が母子関係の質を決めるうえで大きな役割を果たしていると考えられる。今後、恐れ・怒りについても分析を進めていくとともに、5カ月に代表される母子間の情動的コミュニケーションについてもさらに検討をして、この間における情動発達に対する母子間のコミュニケーションならびに児の行動的・生理的特徴(気質的傾向)の影響について明らかにするための手がかりを得たいと考えている。

5カ月時における児の情動表出に対する母の反応について

ここでは、母子間の情動的コミュニケーションについての詳細かつ有効な分析を行うための前提として、前述の母子のうちより12組をランダムにえらんで、児のポジティブならびにネガティブな情動表出に対する母の反応の特徴についての記述を試みることにする。

分析はビデオテープを再生し、3名の分析者によって行われたが、2分30秒ごとに30秒間についてタイムサンプリングにより実施された。児については、表情ならびに声が分析の対象となった。

すなわち、(1)強いネガティブ、(2)ネガティブ、(3)弱いネガティブ、(4)強いポジティブ、(5)弱いポジティブまたはニュートラルのカテゴリーが用いられた。また母の反応としては情動の質を(1)ネガ

ティブ、(2)弱いネガティブ、(3)ニュートラル、(4)ポジティブ、(5)弱いポジティブと分類した。

以下に分析結果の概略を図示する。

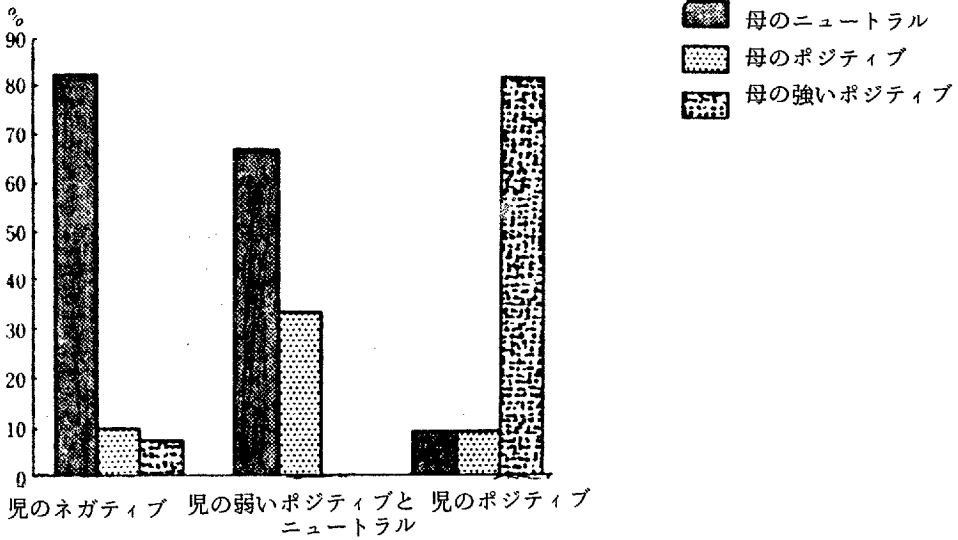


図1. 児の情動表出に対する母の反応

まず、図1に示すように母は全然ネガティブな情動表出によっては応答していない。また児がポジティブな表出をすると、母は強いポジティブな応答をするが、児のネガティブな表出に対しては

ニュートラルに回答していることが分かる。

つぎに、図2、図3はそれぞれ児のネガティブな表出、ポジティブな表出に対して母が応答しない率を表出の種別に示した円グラフである。

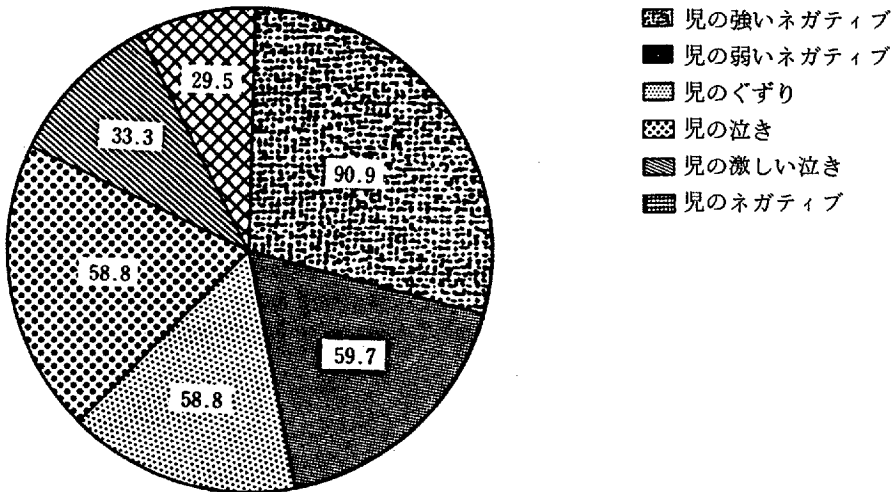


図2. 児のネガティブな表出の種別とそれぞれに対する母の無反応の率

図2から児のネガティブな表出のうちでは強いネガティブと弱いネガティブで半分近くを占めていることが分かるが、母は児の普通のネガティブ

な表出及び激しい泣きに対して反応しないことは少なく、弱いネガティブな表出に対してはほとんど反応しないことが分かる。

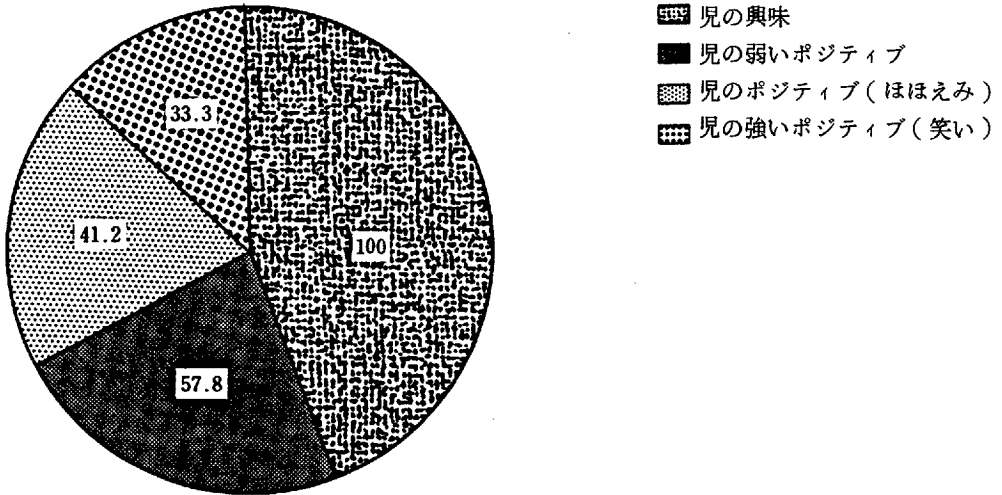


図3. 児のポジティブな表出の種別とそれぞれに対する母の無反応の率

つぎに図3から児のポジティブな表出のうちでは興味を示す表出が半分近くを占めていることが分かるが、母はそれには全く応答していない。これに対し笑い、さらにほほえみに対してはよく応答していることが示されている。

以上のことから、5カ月児に対して母は児のポ

ジティブな表出に対してははっきりとポジティブな応答をすることで、児の快的な状態を維持させあるいは刺激しようとし、他方児のネガティブな表出に対してネガティブな反応をすることは非常に少ないことが分かる。これらのことはさらにサンプル数を増して検討していく必要がある。

Abstract

A Study on the Socialization of Emotion and the Mother-Infant Interaction

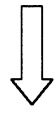
Kazuo Miyake*, Yuko Kanaya**, Chiaki Nakamura*, & Donna Bradshaw*

1. Emotional development as manifested in facial and behavioral expressions is influenced by a number of social and individual factors. Among them are mother-infant emotional interaction — what types of emotions the mother displays to the infant and how she responds to the infant's changing expressions — and the infant's temperament. As a first step to elucidate this issue, a longitudinal data collection was carried out in Sapporo for the first 12 months of life with 48 healthy infants as the subjects. So far, our data indicate the possibility that mother's style of emotional communication in interacting with her infant is related to the individual differences in the intensity of emotional expressions in infants at 12 months.
2. Analysis of the mother-infant interaction at 5 months of infant' age reveals that the mother seldom responds negatively to her infant's negative emotion, while encouraging infant's positive emotion by expressing clearly positive or playful affect.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 生後1年にわたる縦断的研究によって12ヵ月時における情動表出の個人差に母子間の情動的コミュニケーションのあり方が関連していることを明らかにした。また5ヵ月時の児の情動表出に対する母の反応の特徴についても検討した。